

グループ 1984年共同執筆「日本の自殺」文芸春秋 2012年3月号を読む

パンとサーカスで滅亡したローマ帝国から日本が学ぶ5つの教訓とは

1. パンとサーカスでローマ帝国は滅亡した

- (1) 諸文明の没落の原因を探り求めて、われわれの到達した結論は、あらゆる文明が外からの攻撃によってではなく、内部からの社会的崩壊によって破滅するという基本的命題であった。トインビーによれば、諸文明の没落は宿命的、決定論的なものでもなければ、天災や外敵の侵入などの災害によるものでもない。それは根本的には「魂の分裂」と「社会の崩壊」による「自己決定能力の喪失」にこそある。
- (2) 過去のほとんどすべての没落した文明は、外敵の侵入、征服、支配などのまえに、自分自身の行為によって挫折してしまっていた。ほとんどすべての事例において、文明の没落は社会の衰弱と内部崩壊を通じての“自殺”だったのである。没落の原因は飢饉、洪水、地震、火災などの災害や外敵の侵略にあったのではなく、その社会の内部、その社会を構成する人間の内部にこそあった。
- (3) 第一に巨大な富を集中し繁栄を謳歌したローマ市民は、次第にその欲望を肥大化させ、労働を忘れて消費と娯楽レジャーに明け暮れるようになり、節度を失って放縦と墮落への衰弱の道を歩みはじめた。それはまさに繁栄の代償、豊かさの代償とでも呼ぶべきものであった。
- (4) 第二に、ローマ帝国各地から繁栄を求めて流入する人口によってローマ市の人口は適正規模を越えて膨脹に膨脹を続け、遂にあの強固な結束をもつ小さくまとまった市民団のコミュニティを崩壊させてしまったのである。こうして一種の「大衆社会化状況」が古代都市ローマの内部に発生し、急速に拡大していった。
- (5) こうして、マンフォードの言う「巨大都市象皮病」にかかったローマは、故郷喪失者たちの大群からなる、無秩序な大衆の集積地と化し、この巨大な大衆を統合する新しい組織原理、人間関係の原理を見出すことができないままに凝集力を喪失していったのである。
- (6) しかも、第三に、これらローマ市民の一部は一世紀以上にわたるポエニ戦争その他の理由で土地を失い経済的に没落し、事実上無産者と化して、市民権の名において救済と保障を、つまりは「シビル・ミニマム」を要求するようになった。
- (7) よく知られている「パンとサーカス」(panem et circenses)の要求である。かれらは大土地所有者や政治家の門前に群がって「パン」を求め、大土地所有者や政治家もまたこれら市民大衆の支持と人気を得るためにひとりひとりに「パン」を与えたのである。このように働かずして無料の「パン」を保障されたかれら市民大衆は、時間を持て余さざるを得ない。どうしても退屈しのぎのためのマス・レジャー対策が必要となる。かくしてここに「サーカス」が登場することとなるのである。

- (8) マンフォードによると皇帝クラウディウス(在位 41 ~ 54 年)のときすでに、公共の費用で催された競技や見世物は 93 日になり、公の休日は 159 日に及んでいたという。そしてそれらはときとともに増え続け、紀元 354 年頃には、競技日は 175 日、公の休日は 200 日ないし 1 年の半ば以上にも達したというのである。巨大な競技場、集会場、娯楽施設、公衆浴場などのローマ時代の公共施設は、遊民化した市民大衆のための古代「福祉国家」・ローマ、古代レジャー社会ローマの「シビル・ミニマム」の施設でもあったのである。
- (9) だがこうして無償で「パンとサーカス」の供給を受け、権利を主張するが責任や義務を負うことを忘れて遊民化したローマの市民大衆は、その途端に、恐るべき精神的、道徳的退廃と喪失を開始したのである。
- (10) ローマの市民大衆が働かずして無償の「パンとサーカス」を「権利」として手に入れることができるようになり、繁栄と福祉の絶頂に達したと錯覚していたときに、ローマ社会の芯は腐り始め、ローマ人の魂は衰弱し、ローマの没落が確実に始まっていたのである。
- (11) 第四に、市民大衆が際限なく無償の「パンとサーカス」を要求し続けるとき、経済はインフレーションからスタグフレーションへと進んでいくほかはない。過去の諸文明が、その挫折と解体の過程でいずれもインフレーションに悩まされていることは誠に興味深い歴史的事実である。
- (12) ローマの場合も、ギリシャと同じで、こうして無償の「パンとサーカス」の要求が際限なく拡大していき、それが配分可能な経済のパイの枠を越えてしまうならば、唯一の可能な方向は、見せかけだけの分け前の増加であり、実質は同じでも名目だけパイを膨らませてみせることであった。こうしたパイの分捕り競争が続く限り、インフレーションは止まるところを知らない。しかも、社会の衰弱過程で次第に生産性が低下し、富の獲得が思うように行かなくなって不況が発生し、にもかかわらず大衆がこの事実を目をつぶって身勝手な要求貫徹を主張し続ける限り、インフレと不況は相携えてスタグフレーションという形をとるほかはないのである。このような意味において、スタグフレーションは大衆社会の病であり、没落過程の社会につきものの病理現象なのであった。
- (13) 第五に、文明の没落過程では必ずといってよいほどにエゴの氾濫と悪平等主義の流行が起る。こうして民主主義はその活力を失って、一方で放縦に走り、無秩序と解体をもたらし、他方で悪平等主義に走って画一化と全体主義の泥沼のなかに腐敗していく。こうして疑似民主主義は没落のイデオロギーとなり、指導者と大衆を衆愚政治の腐敗のなかにひきずり込んでいく。この状況は冒頭に引用したプラトンの『国家』のなかでも指摘しているとおりのことである。エリートは大衆迎合主義のなかに自信と責任を失って崩壊していき、大衆の思考力、判断力は目にみえて衰弱し、低下して、社会はその「自己決定能力」を喪失していくのである。かくて、没落前夜の社会はソドムとゴモラの運命に陥ろうとしている「破滅の都市」、プラトンの言葉を借りるならば、「一切のものが釣合いを失っている底知れない深淵に落ち込もう」としている「破滅の市」と化していくのだ。
- (14) 古代都市ローマには世界国家の全域から無数の人口が流入してきて、都市の規模は急速に巨大化し、ローマ市民団という共同体の人間関係のきずなは崩壊して、遊民化し、ばらばらになった市民大衆からなる大衆社会化状況が出現してくる。世界国家の心臓部に吸引され、集中されて

きた富に群がる遊民が、無償の「パンとサーカス」と自制なき権利を要求して活力なき「福祉国家」、怠慢な「レジャー社会」への道をたどるとき、やがてこの社会の心臓部は老衰し、その動脈は硬化し、頭脳はかつての輝きを失い、神経は鈍化し、麻痺し、社会は衰弱していく運命を辿ることになるのである。

(15) まさに巨大化した世界国家がその心臓部の繁栄をもたらし、そして実に皮肉なことに、この繁栄こそがめぐりめぐってやがては、世界国家の心臓部を衰弱させることになっているのである。この意味では、没落は繁栄の代償であり、滅亡は巨大化の代償であったのだ。

P96 ~ 98

2. 日本の自殺、日本の没落を阻止するために

(1) 以上みてきたように、疑似民主主義は放縦とエゴ、画一化と抑圧とを通じて、日本社会を内部から自壊させる強力なイデオロギーであった。この「自殺のイデオロギー」が超克されない限り、日本の没落は不可避である。

(2) われわれは世界帝国の繁栄の段階に達したローマが、その豊かさの代償ゆえに、放縦と精神的墮落に陥り、都市化と大衆社会化状況の出現を通じて遂には「パンとサーカス」の「シビル・ミニムム」に自律精神を喪失し、エゴと悪平等主義とインフレのなかに、魂の内側と社会の最深部から腐敗していくのを見てきた。そして、いま、第二のローマ帝国の道を歩みつつあるかのごとくみえる日本社会が、これと同じように、故郷喪失者の大群からなる巨大都市の大衆社会化状況のただなかで、「パンとサーカス」の「要求貫徹」、「闘争勝利」のシュプレヒコールを繰り返しつつ、魂の内側と社会の深部から喪失し、腐敗していくさまをわれわれは目撃している。

(3) 人間個人の自殺の場合と同様に、人間社会が自殺に向かって進んで行く場合にも、生きようとする意志の急速な喪失が観察されるものである。トインビーが「自己決定能力の喪失」と呼んだものも、まさに試練に耐え、困難に挑戦し、自らの力で自らの未来を切り拓いていくという生命力の驚くべき減退であった。

(4) われわれはあらゆる症候からして日本社会内部に強力な自壊作用のメカニズムが働いていること、そしてこのメカニズムを除去しえない限り、日本は自殺してしまうかも知れないということ、時間の遠近法に照らして論じてきた。だが、一体どうすればわれわれはこの自殺への危険な衝動を阻止することができるのか。そのためには、過去の諸文明の没落の歴史から、若干の教訓を引き出して整理しておくことが必要であろう。

(5) 諸文明の没落の歴史からの第一の教訓は、**国民が狭い利己的な欲求の追求に没頭して、みずからのエゴを自制することを忘れるとき経済社会は自壊していく以外にない**ということである。消費者にせよ、勤労者にせよ、あるいはまた政治家にせよ、経営者にせよ、利己的な衝動に押し流されることなく、自己抑制しつつ、どこかに調和点を見出そうとすることを学ばない限り、際限のないエゴは放縦と墜落に至るほかはない。

(6) 第二の教訓は、**国際的にせよ、国内的にせよ、国民がみずからのことはみずからの力で解決するという自立の精神と気概を失うとき、その国家社会は滅亡するほかはない**ということである。福祉の代償の恐ろしさはまさにこの点にある。

- (7) 第三の歴史の教訓は、エリートが精神の貴族主義を失って大衆迎合主義に走るとき、その国は滅ぶということである。政治家であれ、学者であれ、産業人であれ、あるいは労働運動のリーダーであれ、およそ指導者は指導者たることの誇りと責任とをもって言うべきことを言い、なすべきことをなさねばならない。たとえ、それがいかに大衆にとって耳の痛いこと、気に入らないことであつたとしても、またその発言と行為ゆえに孤立することがあつたとしても、エリートは勇氣と自信をもって主張すべきことを主張せねばならない。
- (8) 没落の歴史からの第四の教訓は、年上の世代は、いたずらに年下の世代にこびへつらつてはならないということである。若い世代は、古い世代とのきびしいたたかいと切磋琢磨のなかにはじめてたくましく成長していくものである。古い世代がやたらに物わかりよくなり過ぎ、若者にその厚い胸を貸して鍛えてやることを忘れるとき、若者はひよわな精神的「もやしっ子」になるほかはない。
- (9) 没落の歴史からの第五の教訓は、人間の幸福や不幸というものが、決して賃金の額や、年金の多い少ないや、物量の豊富さなどによって計れるものではないという極く当り前のことである。人間は物欲を満たす動物と考える限り、欲望は際限なく広がり、とどまる所を知らないであろう。いかなる欲望充足の努力も、永遠にこの肥大化する欲望に追いつくことはできず、満足することがない。それは砂漠の“逃げ水”のように、追っても追ってもつかまえることはできない。そしてこの欲望の肥大化のサイクルから解放されて自由にならない限り、人間はつねに不平不満の塊りとなり、欲求不満にさいなまれ続け、心の安らぎを得ることがないであろう。
- (10) 歴史的な事実を照らしてみると、確かに第二次大戦後の日本は物質的にはめざましい再建をなし遂げたが、精神的には未だにほとんど再建されてはいない。道徳は荒廃し、人心はすさみ切つて、日本人の魂は病んでいる。日本はその個性を見失つてただぼう然と立ちつくしたままである。未来の歴史家はこの時代をどう見ることになるのであろうか。そして生まれくる若き未来の世代はこの病める日本をどうしようとするのであろうか。

P115 ~ 116

[コメント]

心ある多くの人々がこの文章を読み、日本の将来を真剣に語り始めた。私がまだ読んでいないと言うと、是非読むようにアドバイスして下さった。日本と国と地方の債務合計が 1000 兆円を越え、どう考えても返済は不可、国家や地方財政は既に実質上破綻をしているにもかかわらず、既得権益を持つ者からの反発、つまり選挙における落選を恐れて、パンとサーカスとのバラマキを許容する政権政党野党と地方の首長と議員。それを国や地方の崩壊の直接の原因とうすうすはわかっているが、「その行政サービスを受けなければ損」と享受し続ける有権者。もうそろそろ、この悪循環を断ち切る時期。本書は啓蒙書と言える。すべての心ある日本人は熟読し、今できることをすぐに行うべきだ。

— 2012年2月19日 林 明夫記 —